

護国神社遺児参拝、硫黄島戦と父の戦死―早内高士さんに聞く

靖国遺児参拝 戦前と戦後の連続3

松岡 勲

早内高士さんとの出会い

二〇一四年十月、とても素晴らしい冊子に出会った。『戦後を生き抜いた妻たちの証言・婦人部戦争体験談集 京都市遺族会連合会婦人部結成五〇周年記念誌』（二〇〇九年一月、京都市遺族会連合会婦人部発行）だ。二人の戦死者の妻が戦中の結婚から夫の戦死の状況、戦後生活の闘いを語る。妻達の戦中戦後の苦労を見つめる編集者の視線は、暖かく柔らかい。その編集者は元京都新聞記者の早内高士さん。早内さんのお父さんは硫黄島で戦死された。早内さんは、小学校六年生（一九五四年）の時、島根県の松江護国神社に遺児参拝をする。

早坂さんは当時の京都市遺族会連合婦人部取材時の様子を次のように私への手紙に書かれた。

京都新聞出版センターから回って来た仕事でしたが、「戦争未亡人」ということで、（母が）同じ境遇の人生を送ったので、快く引き受けた仕事です。

真夏の暑い日。一軒一軒訪ね歩いて、高齢の未亡人の方の話をテープを回しながら取材したことを思い出しました。市からの名簿を頼りに各自宅までお伺いしたのですが、久

しぶりに冊子を開いて見ると、ほとんどの皆さんは九十歳代で、もう大半の方は鬼籍に入られたのではないのでしょうか？



早内高士さん

松江護国神社の遺児参拝

早内さんとは何度か手紙でやりとりをした。そのうち新型コロナウイルスの蔓延時期になり、お目にかかれないうままだった。ようやくその流行が下火になった二〇二一年十月、京都で二度お会いできた。仁和寺のバス停まで迎えに来てもらい、お宅まで案内してもらった。母屋と離れがあり、庭の手入れが行き届いた京都らしく感じられる旧家だった。

早内さんは、島根県美濃郡豊田村（現在の益田市）に生まれた。お父さんが戦死された子ども時代を早内さんは次のように語られた。

自宅の玄関に「遺族の家」のシールが貼られていて、村の人たちが一礼して通っていたことを思い出しますが、

他にも「遺族の家」はあちこちにあったので余り気にしてはいませんでした。もし戦争に勝っていたら、集落の山裾にあった忠魂碑の隣に「早内神社」が建っていただろうと村の長老に聞いたことがあります。それで村人に特別扱いされて「坊ちゃん」と呼ばれて育ち、弟から「なぜ、お兄ちゃんは坊ちゃんで、ぼくは威雄ちゃんなの」と言われたことがあります。確かに特別扱いされて「嫌だなあ」と思っていました。小学校へ入学した頃から日本の戦後が始まり、クラスメイトはみんな「早内君」と呼んでくれてほっとしたことを覚えています。

松江市から離れた豊田村にも空襲はあった。その記憶がある。

終戦直前の思い出は上空をB 29が飛んでくると村のサイレンが鳴り、近所の防空壕に逃げ込んだ記憶があります。都会の空襲と違って爆弾をこんな田舎に落とすわけもなく、さほど緊張感はなかったと記憶しています。

早内さんの戦後の記憶は、八月一日の天皇の玉音放送から始まる。

終戦の日の玉音放送をはっきりと覚えています。近所の家
の庭に沢山の大人たちが集まっていて、騒音交じりの天皇
の声が流れていて大人たちがひれ伏して泣いていた光景を
今もはっきりと覚えています。終戦記念日に当時の皇居前
の映像が流れると毎年、あの光景が思い出されます。

その後、小学校四年生の時に講和条約が発効し、日本がアメリカから独立した。以下、日本の独立時についての校長の話。（当時、小学校一年生だった私にも同じ記憶がある。）

小学校四年生の時、講和条約が結ばれて、晴れて日本が独立した日の朝の朝礼で壇上から校長先生が「日本が独立しました」と言ったことや、クラスに帰って担任の先生と一緒に喜んでいたことも覚えています。

そして小学校六年生の頃（一九五四年）、早内さんは、松江護国神社に遺児代表として参拝した。その時の記憶は鮮明ではない。護国神社への遺児参拝について早内さんの記憶は次の通りだ。

小学五生から六年生の頃だったか、母に連れられて松江市の遺児参拝体験に参加したことは余り記憶になく、山陰線の汽車に乗った思い出と初めて見る松江市内の都会の風景と宍道湖の思い出しかありません。参列したのは野外だったのか、学校のどこかの講堂だったのか、生前に母に確認しておけばよかったと思うのですが、何せ中学二年生から長崎の叔母の家に国内留学（＊早坂さんは中学二年生から高校卒業まで長崎に寄留）していたので、他にも父親のこ
とをもっと聞いておけばよかったと今になって後悔しています。

父との別れ

早内さんは一九四一年五月に生まれた。お父さんの早内正雄さ

んは一九四五年二月に硫黄島で戦死された。正雄さんの靖国神社合祀は一九五一（昭和二六）年一〇月で、日本の独立前で大変早い。早内さんは父との別れを鮮明に覚えている。

ビルマ戦線で負傷して一時帰国して農林省の八ヶ岳農事試験場の一角の住宅で怪我を癒やして、一九四四年秋に硫黄島戦線へ出征して行った時のことは、はっきりと覚えています。

初秋の信州、八ヶ岳山嶺。茅野へ向かうならかな山道を走る小型トラックの荷台から手を振る父の姿が今も鮮明に焼き付いています。母も乳飲み子の弟を抱きしめ、わずか三歳半の私の手を取り、懸命にサヨナラしたあの日の光景は忘れられません。

また出征する前の父の思い出について、早内さんは次のように思い出す。

二歳半だったころ、鳥取市内の借家に住んでいて、風呂の湯船の中で親父が指を弾いて私の顔に湯を浴びせて遊んでいたことを覚えています。それとご飯に砂糖をかけて怒られたこと、外で肩車をして貰ったことの三つのシーンをなぜかはつきりと覚えています。他の思い出は全くありません。

お父さんが戦死した子どもで、父の記憶があるかないの違いは大きい。私の場合は、一歳になる前に父は武漢の近くで戦死、その前に戦地に着いた母と私の写真を、父が見て大変喜び、返事した軍事郵便が残っているだけだ。早内さんのお父さんとの別れの

話を聞いて、私の大学時代の先輩とお父さんとの別れを思い出した。私の先輩は私より四歳上で、お父さんはフィリピンのホロ島で戦死した。出征する父とは五歳の時に別れた。靖国遺児参拝文集に、彼は「思えば、十年前、戦争のために戦地に出征された父でした。出発するとき、僕の頭をあたったかい愛情のこもった手でそつとなで去っていかれた。」と書いた。

早内さんも私の先輩も、成長する中で父の記憶が大きな位置を占めていったのだろう。

激戦の硫黄島と父の死

早内正雄さんは、一九一二（明治四十五）年六月十九日に生まれた。一九三五（昭和十）年に召集され、中国戦線、ビルマ戦と転戦、同戦線で負傷した。そのため一時帰国後、さらに一九四四（昭和十九）年二月、硫黄島に出征、悲劇の硫黄島戦で一九四五（昭和二十）年二月二日に戦死された。

陸軍大尉、速射砲第十二大隊長として守備隊を指揮した。終戦直前の二十年（一九四五年）二月一九日、米軍が硫黄島に上陸。四日目の午前一〇時過ぎ、守備隊は、元山飛行場の上陸してきた米軍戦車隊を迎え撃ち、戦死。翌朝、島のシンボル摺鉢山に星条旗が掲げられた。日本兵二万一千人、米兵約七千人が戦死した史上最大の悲惨な戦いと語りつがれ、映画にもなった。硫黄島守備隊は、孤立した太平洋の小島で硫黄の臭いと水不足と闘いながら、全長一八キロに及ぶ地下壕を掘りめぐらせ、敵を迎え撃った壮絶な死

闘だった。

石原俊著『硫黄島 国策に翻弄された一三〇年』（中公新書）は硫黄島戦の残酷な実態を詳細に記述した本だが、そこで紹介されていたNHKスペシャル『硫黄島玉砕戦 生還者六一年目の証言』（NHKエンタープライズ）を見ると、硫黄島戦は「兵士ひとりひとりが盾となり、米軍の占領を遅らせ皇国に寄与する」というさまざまな持久戦であったという。

以下、石原俊著『硫黄島戦』から。

硫黄島の地上戦においては、三月二六日（*栗林大将以下三〇〇人余りが最後の総攻撃を敢行し壊滅。これにより日米の組織的戦闘は終結した。）以降の日本軍の内部こそ、飢えと傷病がますます広がり、自軍内での仲間割れや殺傷、そして負傷兵の自決が頻発する、言語を絶する凄惨な状況が展開したといわねばならない。日本軍側（朝鮮人など外地出身者を含む）の死者・行方不明者数は厚生労働省の調査によれば二万人超、米軍の死者は六八二人であった。日本側の致死率は実に九五%以上に達しており、米軍捕虜となって生き延びた将兵は約一〇〇〇人にとどまった。

早内さんは、父の戦死公報が自宅に入り、新聞記者が殺到し、「硫黄島の勇士」と報道したことを覚えている。

部下に率先して、速射砲に爆薬を詰め、敵戦車に肉弾戦を挑んだ父の果敢な戦死を当時の新聞は「隊長、自ら戦車と格闘！」とはやし立てた。二階級特進の武功を得た父の戦

死の状況は防衛省や米軍の資料として、また津本陽の『名こそ惜しめ 硫黄島魂の記録』や元AP通信の著名従軍記者、R・F・ニューカムの著書『硫黄島』などに克明に描かれている。当時、疎開先の父の実家、島根県の片田舎には連日新聞記者が押しかけ、おふくろが気丈に対応して「軍国の妻」を演じていた。が、夜になると二人の男の子を両脇に抱きしめ「お父さんのように強い男の子になるのよ」と諭した。

京都新聞社入社、ベトナム戦争

その後未亡人になったお母さん、千枝子さんは、お父さんが生きて帰って来たら、東京へ一緒に帰るつもりが果たせず、島根県の実家で夫の忘れ形見と祖父の長一郎さんとの生活を始めた。東京で幼稚園の先生をしていたお母さんは、通信教育で教員免許を取得して田舎で教員生活に入った。長一郎さんは、早内さんが小学校二年生の夏休みに鮎釣り中に心臓麻痺で急死した。お母さんは同



陸軍大尉だった父早内正雄さんと母、千枝子さん

僚の年下の教師（早内さんの義父）と再婚した。その人生は一転、輝き出した、と早内さんは言う。

先に触れたように、早内さんは長崎にいたおばさん（お母さんの妹）宅に中学校二年生の夏休みから高校卒業後まで寄留した。その訳は、「かわいい子には旅をさせよ」で、島根県の田舎にいては大学進学もままならないという両親の考えからであつたろうと早内さんは言う。その頃、長崎の同級生には被爆者が多くいた。次のような印象的な体験があつた。

長崎の中学時代、思えば原爆投下からわずか一〇年後のことだ。同級生のほとんどが原爆手帳を持ち、原爆傷害調査委員会（ABCC）での定期検査を受けていた。

夏休みが終わって二学期が始まるとクラスメートの机に花束が置かれていた光景を何度か体験した。一〇年後の原爆病死だった。

長崎時代を終わり、早坂さんは新聞記者なることを希望し、同志社大学に進学した。卒業後の一九六五（昭和四〇）年に京都新聞社に入社。新聞記者になった頃、ベトナム戦争（一九六五年一月～一九七五年四月）が始まった。

入社一年目当時、ジョンソン大統領によるベトナムへの北爆が始まった。早内さんは、北爆下のベトナムに行きたいと考え、編集長に申し入れた。親父が硫黄島で死んでいることもあり、「（どこでもいいから）戦場が見たかった。」と早内さんは言う。当時の日高編集局長（大学時代のゼミの先生の先輩で、満州からの引揚者。満州日日新聞前身の、活きのいい記者だった。）は、「そうか分かった。」しかし共同通信が特派員を出しているから、京都

新聞としては派遣できない。行くなら辞表を書いて行け、もし帰って来たら辞表を破ってやる。」と言った。それで有休を取り、冬のボーナスをつぎ込み、安いアジア周遊旅行券を使ってベトナムに行った。「二人でベトナムに行った。英語もできんのに。」「失うものもないし、結婚もしていないし。」「そこで死んでもいい、本望や思っていた。親父が戦死しているし、親父と一緒にやと。」「まあ記者魂ちゆうか、無鉄砲やつたんですな。」と早内さんは語る。ベトナムで会ったアメリカ兵はもうノイローゼになってびびっていた。「なんでこんなところで死ななあかんのか。」「アメリカのために死ぬのならいいが、こんなところで死にたくない。」と言っていたことを思い出す。

硫黄島慰霊の旅

文化部から社会部に転属した頃、父が死んだ硫黄島を訪ねる機会が訪れ、待望の硫黄島に行くことが実現した。この時は、「ああここが父の死んだところか・・・」といった感じで、親父と酒を酌み交わすという感傷はなかったが、現地を訪ねることができたのは大きかった。

京都新聞に入社して三年目に待望の社会部に配属され、自衛隊の京都地方本部を取材したのが縁で「早内太尉の息子が京都新聞にいる」と防衛庁（現在の防衛省）に伝わり、自衛隊の特別機で硫黄島に取材に行きました。一週間も基地の宿舎に寝泊まりして毎朝の国旗掲揚やランニング、ソフトボールなどをし、親父の戦死した飛行場の滑走路など

も見学しました。帰国後原稿を執筆したり硫黄島の砂を持ち帰って墓に入れました。

さらに一九九八年三月に太平洋に眠る戦死者を慰霊する「小笠原・硫黄島慰霊・裏千家の船」の硫黄島慰霊の旅に参加した。この時は硫黄島で亡くなった父とほんとうに出会ったという感慨が強かった。

戦地から送られて来た遺書に「生きて帰ったら成人したお前と酒を酌み交わしたい」と書いてあり、今回、初めて父の戦死した飛行場の滑走路で「親父、約束の酒を酌み交わそう」と一人でつぶやいて、持参した伏見の酒を酌み交わしました。同行した同級生の大部分の女性は大声で「お父さん！」って叫んでいました。同い年の遺児の女性たちと夜空を眺めながら「お父さんたちもきつとこの美しい星空を眺めて故郷を思っていたのよね」と皆で涙したことを昨日のように思い出します。

またお父さんの亡くなった地下壕を発見した早内さんは次のように書く。

翌朝、宿舍近くで「独立速射砲第一二大隊」の壕を見つけました。硫黄島の戦記ものに出てくる「早内大隊長」の壕でした。前日案内された他の壕には無数の遺体が骸骨になって散乱していました。今も毎年のように政府の遺骨収集団が上陸していますが、未だ半分の遺骨しか収集できていません。日本軍約二万人、米軍海兵隊約七千人が戦死した激戦地の戦後はまだ終わっていません。

靖国神社についての思い

早内さん一家は戦争に翻弄されてきた。長男が早内さんのお父さんで硫黄島で戦死、次男の叔父は下関の空軍基地内で交通事故死、海軍少尉だった三男の叔父も独身のままニューギニアで戦死した。息子が三人とも戦死した祖母のらくさんは、次男、三男の死後に四八歳でショック死された。

最後に早内さんに「靖国」について聞いてみた。私の場合とちがい早内さんは「靖国」に特段の拘りはなかったが、総理大臣らの公式参拝等の「靖国の政治的利用はやめてほしい。」との思いだった。

靖国神社には新聞社に入社以来、東京出張の度にいつも参拝していました。「もし戦死したら靖国にいるから、いつでも会いに来い」という父の遺言を信じて人生のその時々報告も兼ねて参拝していました。なのに、A級戦犯と一緒に祀られて、靖国合祀問題が起こり、いつも「何で戦犯たちと一緒に」と腹立たしい思いをして来ました。「父に会うために参拝しているのに何で戦犯と一緒になんや」とずっと思い続けて来ました。政争の具にはして欲しくないのです。戦犯たちの霊をどこかに移して戦争被害者の戦死者だけの新しい神社に生まれ変わって欲しいと思っています。そして二〇万人とも言われる息子や親たちを戦争で殺された戦没者の霊の想い、戦争の悲惨さを後世に伝えていって欲しいと思います。その親たちはとくに亡くなり遺

児たちも八〇歳を超えて来ました。何とか戦没者の霊を祀る新しいシンボルを建設して欲しいと願っています。

おわりに

最後に八〇年間の人生、特に新聞記者時代を振りかえる時、何が充実していたかを早内さんに聞いた。

それはいろんな人に会えるのがいい。いろんな各界の人に会えたのはよかった。やっぱり書きたいことを書けるから。客観報道とはいえ、湯川秀樹さんを取材しても新聞記者によって中味が全然違う。取材した人の中から年に五人ほどこれという人、気のあう人を作れと若い記者に言っている。何千人かを取材して、そういう人が年に五人いたら、十年記者をしたら五十人になる。京都にいたら、すごい宝物になると言うのだけれど、なかなかそういう若い子はいない。

早内さんの聞き取りを終わり、前回の西山誠一さんの話（「反天皇制市民1700」第50号）を思い起こした。そこには記さなかったが、西山さんは「内なる靖国」という言葉に触れ、それには「靖国神社↓護国神社↓忠魂碑↓慰霊碑」というヒエラルキーがあり、それぞれが相まって戦争遂行を目的とした「慰霊」の下支えをしてきた歴史があると指摘した。早内さんは護国神社の遺児参拝については詳しく記憶していなかったが、各地の護国神社は靖国神社を頂点にした「慰霊」の機能を果たしてきたと言える。今後そのことにも焦点を当て調べて行きたい。

早内さんのお話の引用は、事前にお送りした「質問」に対する「回答」と以下に掲載の早内さんの文章から取った。

「父との再会」『随筆きようと』九六号

「父の面影を追った、戦後七十年」『随筆きようと』一〇五号

なお、その他に八〇年の人生を振りかえった「遊びせんとや生まれけむ 趣味と仕事に生きた人生」『随筆きようと』第一一七号）がある。

（付記）

早内さんの記者人生最初のベトナム行の京都新聞掲載の記事を探したがみつからなかった。しかし次の記事がヒットした。早内さんの初志が更新されていたことを確認できた。（ベトナムの熱気」二〇〇一・四・一一、京都新聞夕刊）

（前略）三十六年ぶりに足を踏み入れたベトナム・ホーチミン（旧サイゴン）市は、すさまじく変貌していた。かつて戦火の中にたった独りで降り立ったタンソンニット空港に、若い女性がいつぱいの団体ツアー客として降りた。（中略）一歩外に出ると日本のツアー客を出迎えるガイドやマイクロバス、タクシーでごった返していた。（中略）外目には「戦争」は、もうほとんど風化しかけているが、押し寄せる急速な社会変化の中で民族文化を守り、新しい祖国をつくうとする姿を、グルメとショッピングツアーで押しかける日本の若い世代に体感してほしい。（早内高士）

（二〇二一・一一・三〇）



明治初大船の集結地、太平洋に臨む鹿児島を船運する小笠原・西園寺・関千重の船が二十日から五、六日は日程停止し頓挫した。船主や船客の船費を船内での貸付、折付でつぎひき、戦争を待てる者として折付の船の参加者は何と感上りたの、聞かれました。

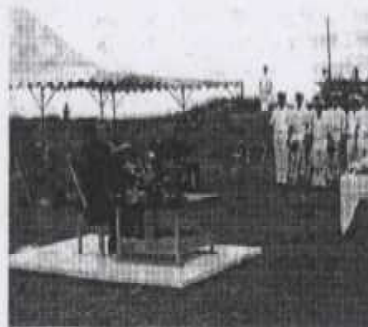


激戦地の跡を巡礼

「胸のつかえとれた」

祈りの船 太平洋に行く

特報
スクランブル



横濱市・天山海鏡碑で献茶式を行う千宗直家元

硫黄島 東京から1250km、
南方に浮かぶ島。

開港の穴川町。戦前までは
1位が5千人が住んでいたが19
04年2月に米軍が上陸。日本
軍2万1千名の硫黄島守備隊
は全滅し、島の地下壕を構築し
て交戦したが、米軍大艦隊の
絶好のような攻撃を浴びせ、
11月10日に及ぶ激戦の後、玉
降した。日本軍戦死者1万9
千数百人、生捕者千人。米軍
戦死者6千八百人。囚虜戦者
2万2千人。損耗は海上約満
隊の戦艦2隻にあり、約4百人
の食糧が欠乏している。

厳かに献茶式
船内で折り鶴、写経も

ターが俄然島に向つて飛び立つた。彼は遠くの人たちを夕刻に帰船。船は一瞬間奥島に向つた。

翌日の朝、船は横濱沖に姿を現した。午前九時、島の北東の小島にたどり着く。いい旅をした。

が壊れてきた船内は、機
つなをがねてくると、バ
ツと崩れるなつて、世帯
までバーナイが崩り上り
り、船は一瞬、数秒の間で崩
れ、翌日は一晩、数箇所の船に
変わった。主人や、船中
に居ても居ても安心になつ
てはいやい。

流石七組、仲調やサイバ
ンなどには船長の船を出して
来た千手堂主は、二年間
海外に滞在し、生かされ
得て、出たの頃まで通

[illegible]

参加者の声

「そのくらい肉親の戦死 げん時、胸がこみ上げてい
り息がつかない程悲しみと後悔」